

---

追悼 西田龍雄先生  
Obituary TATSUO NISHIDA

---

西田龍雄先生のご逝去を悼む

梅田博之

日本言語学会元会長・顧問西田龍雄先生は、2012年9月26日午前5時24分、京都府宇治市の病院で心不全のため永い眠りにつかれた。享年83歳であられた。

先生は、1958年に京都大学文学部助教授に就任され、1972年に教授に昇任、言語学講座を担当された。そして1992年3月に停年退官され、同年4月に京都大学名誉教授の称号を受けられた。その後文部省学術情報センター教授兼副所長を1994年3月まで務められた。その間、京都大学において膝下に多くの優れた人材を育成されると共に、日本言語学会会長、日本学術会議会員、国際言語学者常設委員会執行委員などの要職を歴任し、終始日本の言語学界の指導者のおひとりとして活躍され、斯学の発展に多大な貢献をなされたことは改めて述べるまでもないことである。

私のように研究室や教室で直接お教えを受けていないものの、ご論著からあるいはご講演やお会いした際のお話を通じて学恩を蒙った者も少なくないであろう。

専門外の私が生先生のご業績について多くを語ることは不適切であると思うが、先生のご業績は、記述言語学の方法に基づく言語の記述研究と歴史比較言語学の方法に基づいた言語変化と系統の研究、未解読文献の解読と言語の復元およびその方法論の提示等々、多岐にわたる。すなわち、ミャンマー（当時はビルマ、以下でビルマと称する）およびタイにおける少数民族語のフィールド調査により新発見を含む少数民族言語の記述研究および比較研究を行い、シナ・チベット語、とりわけチベット・ビルマ諸語の系統関係の研究に新しい知見を提示された（『東アジア諸言語の研究Ⅰ』2000年）。なお、先生はその考察の過程で系統関係全体の新しい見通しを得る軸となる言語である「リンク・ランゲージ」という概念を導入しておられるが、高句麗語を韓国語と日本語やツングース語などを結ぶミッシングリンクとする李基文教授の考えと関連して興味深い。先生はアジアの文字に関しても研究を進められ、漢文、パクパ文字による蒙古語文および西夏文字碑文を担当された共同研究『居庸関』（1958年）によって1959年に日本学士院賞を受けられた。特に、西夏語・西夏文字に関してはその後さらに西夏語の韻書や仏典などの資料によって解読と復元に成功された（『西夏語の研究Ⅰ・Ⅱ』1964-66年）。『西夏語の研究』に対しては1968年に恩賜賞が授けられた。西夏語の研究は後述の華夷訳語の研究とともに、

アジアの碑文を含む文献言語の研究に「示音質」という概念を導入して文字と言語の対照を解析する先生独自の的方法論である「文献言語学」の確立に繋がっていく。また、言語以外にも西夏に関する歴史、宗教などの領域で新しい知見を示し東洋学研究の一分野である西夏学の確立にも貢献しておられる（『西夏王国の言語と文化』1997年）。「華夷譯語」に関しては『西番館譯語』（1970年）、『緬甸館譯語』（1972年）、『多續譯語』（1973年）等に関する研究があり、チベット語・ビルマ語等の言語史研究の重要な出発点を提供されると同時に、未発表・未研究の諸種の「華夷譯語」に関しても展望を述べておられる。

上述のような重厚にして赫赫たるご功績により、1999年に日本学士院会員に選出され、2003年に瑞宝重光章を受章され、2008年には文化功労者として顕彰を受けられた。

このような偉大な業績を残された先生と、私は残念ながら個人的に親しくお付き合いさせていただく機会を得ることはできなかったが、いくつかの接点において先生のお人柄に触れ、恩恵を受け、感慨深い思い出を持っている。

私は1965年2月にアジア・アフリカ言語文化研究所（以下AA研）に入ったが、一日も早く現地に入りフィールドワークをすることが念願だった。西田先生はすでに1958年にビルマ国、1964年にタイ国に出張され、フィールドワークを行い新発見を含む少数民族語の記述研究および比較研究の成果を『言語研究』や『東南アジア研究』に次々と発表しておられたのを、当時同僚の坂本恭章氏が東南アジア研究センターの派遣でカンボジアに旅立つなか、まだ待望の韓国出張を果たせずにいた私は羨望と感嘆の思いを持って読ませていただいていたのだ。先生は1963年にAA研設立準備のために山本達郎先生・三根谷徹先生とともにヨーロッパ諸国の研究機関を調査されAA研の設立構想に参画された。AA研設立後は運営委員会、合同構想委員会、研修委員会等の研究所の根幹となる委員会の委員を継続して引き受けてくださり、研究所の運営や研究活動を指導・支援してくださった。このように先生はAA研と長く深い関係にあり、私は所員としてあるいは所長として、先生の存在とご指導に接することができたことを心から感謝している。

先生は日本言語学会の活動についても大きな貢献をされた。1957-60年度に幹事、1961-72年度に委員、その間1971-72年度に文科系学会連合委員を務め、1975-76年度には、学会の制度改革により全会員の選挙で選出された服部四郎初代会長のもとで常任委員を務められたが、私も常任委員の末席を汚し会議の合間に先生のお人柄に触れる機会があった。1977-78年度（泉井久之助会長）には編集委員長を務められたが、新制度発足時の方針として編集委員長は‘Editor’として委員長ひとりの見識と責任を以て学会誌の編集を行うことになっていて編集委員会は置かれなかった。現行の編集委員会は1985年度から復活したものである。1979-80年度には、服部・泉井両先生の後を継いで、第三代会長に選出され、爾後1984年度まで副会長、以後は顧問として学会のために尽くされた。その間、1988年度から1999年度まで

再度委員を務めておられる。先生は上述のように学会の要職を務め学会の発展に尽力された一方、私の知る限りでは、学会誌『言語研究』にタイ諸語の記述ならびに比較に関する研究3篇、チベット・ビルマ諸語の記述ならびに比較に関する研究3篇、書評論文を含め西夏語音再構成に関する研究2篇の計8篇の学術論文を発表しておられる。また、大会での公開講演は、第78回（1979年6月、於東京都立大学）の会長就任講演「チベット・ビルマ諸語と言語学」を始め、第64回（1971年5月、於津田塾大学）「西夏文献の話」、第106回（1993年6月、於明海大学）「東アジアの新出言語をめぐって」、第112回（1996年6月、於麗澤大学）「日本におけるチベット言語学一回顧と展望」（北村甫氏と共同）の4回にわたり、先生がいか言言語研究の最前線に常に立つ先進的で生産的な研究者であったかがわかる。

先生の思い出として忘れられないことは、おそらく多くの人のご存知ないだろうが、1996年9月にソウルの檀国大学校で韓国口訣学会（南豊鉉会長）主催による第1回「アジア諸民族の文字に関する国際会議」が開かれ、西田先生が招待講演者のひとりとして参加され「西夏文字の特性と西夏語の復元」と題する講演をされたことである。当時、私は科研の調査でソウルに滞在しており、旧知の南豊鉉教授の依頼を受けて西田先生の参加をお願いし且つ講演の司会を務めた。また、南豊鉉教授がAA研の客員研究員（1984年度）だったときから調点研究で交流があった築島裕教授（日本学士院）と石塚晴通教授（北海道大学）がそれぞれ「日本の漢文訓読研究の回顧と展望」、「アジア諸民族における漢文訓読」と題して講演をされた。他に、李基文教授（韓国学術院）が「東北アジア文字史の流れ」という基調講演をされ、清格爾泰（内蒙古大学：契丹文字）、Hiu Lie（Göttingen大学：女真文字）、徐琳（中国社会科学院：白族の文字）、S. R. Ramsey（Maryland大学：Writing Among the Minority People of China）、戴慶廈（中国中央民族学院：中国漢字系諸文字）、Buy Duy Tan（Hanoi大学：字喃）等の諸教授も参加された。当時、西田先生と面識のある韓国の研究者はほとんどいなかったもので、学会終了後のエクスカージョン（民俗村訪問）にもお供し初秋の韓国の情景をご一緒に愉しんだのであった。

先生は京都大学で言語学講座を担当され、ご専門の研究以外に言語学一般についても考察と紹介をされ、後進たちの教育に当たられた。その目的で編まれ自らも執筆されたものとして『言語学を学ぶ人のために』（1986年）がある。言語学の各分野にわたり新旧の理論をバランスよく解説した入門書で私も麗澤大学に移って学生の指導をするようになって概論のテキストとしてよく使わせていただいた。

2001年2月のある日、京都の先生から突然お電話があり、陛下を御所にお訪ねすることになったから来るようにとのことであった。当日は西田先生と築島裕先生と私の3人で御所に伺い、両陛下と紀宮様もおられて、ご一緒に夕食をたまわり食後のお茶の時間も含めて、いろいろとお話しをさせていただいた。当時NHKでやっていた大河ドラマ『北条時宗』のタイトルバックに出て来るモンゴル文字のことも話題となり、西夏文字、ハングル、日本・韓国の口訣など、東アジアの言語と文字について西田・築島両先生とともにお話をさせていただく機会を持つことがで

きたのはまことに光栄なことであった。しかし、以後先生にお目にかかる機会はなく、これが先生との最後の出会いとなってしまった。

その後は、巡り来る年ごとに年賀状を差し上げるだけに留まっていたところ、昨年9月26日に逝去されたとの報せを受けまことに痛恨の極みである。あらためて生前の先生のご業績とご指導に思いを致し、心から敬意と感謝の念を捧げ、ご冥福をお祈りしたい。

(日本言語学会顧問／東京外国語大学・麗澤大学名誉教授)

## 西田龍雄先生の学問研究

庄垣内正弘

西田先生の業績表は、先生が大学院生であった1953年の論文「ビルマ語音韻体系の構造的分析」(『東方学』7)から亡くなられる前年である2011年の書評論文「『英蔵黒水城文献5』」(『東洋学報』93)まで隙間無く埋め尽くされ、その数にまず圧倒される。

主要業績の内容はシナ・チベット語、就中チベット・ビルマ語の研究、西夏語の研究、「華夷訳語」の研究の三種に大別できる。そのほか文字の研究や日本語の系統に関する研究がある。

先生のチベット・ビルマ語の研究は歴史比較研究と個別方言の文法記述が中心であった。1960年代以降、日本におけるこの分野の研究を牽引され、その成果は国際的にも評価されている。最終的には三省堂『言語学大辞典』の項目執筆で総括されたといえる。チベット・ビルマ語研究も今は中国やヒマラヤ山脈地域での現地調査を踏まえた詳細な文法記述や比較研究が可能となった。先生もビルマやタイでの現地調査を通して実際のデータを収集されることがあった。その中にはビス語の再発見なども含まれる。しかし、大概は二次的な資料を利用された。その研究結果はいずれ後進の手で新しいデータと枠組みに基づいて修正されることになる。もっとも、それまでには随分時間が掛かるにちがいない。

西夏語もチベット・ビルマ語に所属する言語である。西夏文字の存在が西欧の学界に知られるようになったのは十九世紀後半で、それ以降この文字の解読に興味をもった研究者は何人か居るが、最終的には西田先生が解かれた。

大学時代に石浜純太郎博士から西夏語研究の手ほどきを受け、一気に西夏語に傾倒されるのであるが、そこには大阪外事専門学校時代に専攻された中国語の素地が作用したと考えられる。漢字を模倣したこの表意文字には素直に親しみを感じられたであろうし、解読に必要な中古漢語についての某かの知識も既に身に付けておられた。

石浜博士自身は、日本に1914年から1929年まで滞在したニコライ・ネフスキーとともに西夏語の研究に携わったが、西夏文字の解読には目立った成果を遺されなかった。

先生が西夏語について最初に発表されるのは京大助教授になられる前年の1957年で、「西夏語音再構成の方法」(大会発表要旨『言語研究』31)あるいは「天理図書館所蔵、西夏語文書について(I)」(『ビブリア』9)である。その後数本の西夏語に関する論文を発表された後『西夏語の研究』(I 1964年, II 1966年)を出版される。この本の中で初めて西夏文字の組織が解明され、西夏語音が体系的に再構された。さらに同書には西夏語の文法要説や西夏文字小字典も掲載されている。学生時代から溜め込んだ知識とアイデアを一気に吐き出したような濃密な内容の堅固な本である。

文字解読にはいろいろの種類がある。文字も言語も不明のものが最も難しいと考えるのが普通で、西夏文字もこれに当たる。しかし、西夏文字の解読はシャンポリオンのエジプト・ヒエログリフやトムセンの突厥文字の解読とはすこし難しさの性格が異なる。いわゆる「暗号解読」の手法とは多少違った方法で西夏文字は解かれた。

西夏語文献のほとんどはロシアのコズロフ大佐によって現在の内蒙古ハラ・ホトから将来された。数千点に及ぶ文献の中には文字解読に直接役立つ資料が多数潜んでいた。西夏文字にチベット文字で音写形を添えた仏典、漢語と西夏語の発音・意味両面での対照辞書、漢文と対応する大量の仏典類も含まれている。さらに漢語韻書を真似た、あるいは西夏独自のシステムをもつ数点の韻書も見つかっている。それらを手中に収めることで解読の準備は大体調う。

実はこのような文献を自由に使える立場にあったのがネフスキーである。彼は帰国後の1937年、スターリン体制下で銃殺されるが、復権後の1960年に出版された『西夏語文献学—研究と字典』(N. Nevskij: *Tangutskaja filologija* (I,II))には自筆ノートの写真版「西夏語字典」が掲載されている。この「字典」に掲げられた韻書類の引用からもその事実は窺える。

西田先生は1950年代後半に私家版として販売されていた西夏文字韻書『同音』の複製本を偶然入手される。当時大まかではあるが発音の判明していた西夏文字音価をこの韻書に代入することによって韻書の構成が解明でき、そこから西夏語の音韻と文字との関係を同時に解明することができ、さらに文字組織も明らかにできる。このことに気づかれたのは先生の豊かな才識に因るものといえる。

ネフスキーの「西夏語字典」には『同音』以外の韻書、たとえば漢語韻書『広韻』をモデルとした西夏韻書『文海』や『文海宝韻』などからの引用もある。先生はそれらを巧く活用された。この「西夏語字典」が無かったら解読は不完全なものに終わっていたにちがいない。それではネフスキー自身は解読のための十分な材料を持ちながらどうしてそれを果たせなかったのか、という疑問が残る。処刑によって研究を中断されたためという人も居るが、私はそうは思わない。文献学者であったネフスキーには解読のための材料はあったが手段が無かった。西田先生は漢語音韻学

の知識と構造言語学の分析手法を駆使することによってはじめて膨大な量のデータを整理し音韻体系や文字組織を解明することができた。

シャンポリオンやトムセンのようにドラマチックな文字解読では無かったが、伝統的な漢語音韻学以外にもサンスクリットや仏教学などの知識を駆使した如何にも東洋学的な解読であった。

『西夏語の研究 I』を出されたのは弱冠 36 歳、早成の研究者であった。当時一回り上の辰年生まれと勘違いした人も居たという。「龍雄」は干支に因んで付けられた名である。

以後、先生は西夏語研究に専念されたのではなく、別の方面に目を向けられる。チベット・ビルマ語の研究を継続させながら、壮大な構想をもって「華夷訳語」研究叢書の刊行に進まれる。すでに 1961 年の「十六世紀におけるパイ・イ語—漢語、漢語—パイ・イ語単語集の研究」と 1963 年の「十六世紀における西康省チベット語天全方言について—漢語・チベット語単語集、いわゆる三種本『西番館訳語』の研究—」において「華夷訳語」の研究法は提示されていた。明・清時代に編纂された漢語とその周辺言語との対照語彙や文例は、古語の音韻や文法を知る上で極めて重要な資料である。先生は『西番館訳語』『緬甸館訳語』『暹羅館訳語』『保羅訳語』『女真館訳語』『多統訳語』の六種を叢書として刊行される予定であった。実際には『暹羅館訳語』と『女真館訳語』とは刊行されず、代わりに『白馬訳語』が孫宏開氏との共著で 1990 年に出版されている。それ以前のは 1970 年から 73 年の間に集中的に三巻が出版され、残りの一巻は遅れて 1979 年に出た。「華夷訳語」の研究は先生のもっとも得意とされる分野で、独自の研究法を用いられた。漢字音写された「外国語」の再構には漢語の知識と言語学的音韻分析法、さらには当該言語と系統を同じくする現代語方言との比較が必要である。先生はそれらを活用して新たな方法論を確立された。我々門下はそれを「文献言語学」と呼んでいる。この叢書には単に古語の再構だけでなく、当該言語と関係する現代方言群の概説も書かれているのでその方言群に携わる研究者には便利である。ただ、丁種本と呼ばれる十八世紀に編纂された中国南部少数民族言語を扱った「訳語」にはまだ重要なものが残されている。若い研究者がそれらに興味を持つことを先生も望んでおられたにちがいない。なお、先生は漢字音写形からの再構には一貫して、明代の順天音（北京音）を対象とした『重訂司馬温公等韻図経』を利用されたが、丁種本にはより新しい南方漢語方言の使用が必要であろう。

「華夷訳語」叢書の三巻目が出た後、先生は日本語の系統に目を向けられる。1970 年代は日本語の系統に関する各種の本が出版されてブームとなっていた。ちょっと遊んでみようかという態度では無く、日本語とチベット・ビルマ語との同系の証明にかなり真剣に取り組まれたことを知っている。十篇に及ぶ論文の執筆には随分時間を掛けられた。しかしブームをリードするまでには至らなかったし、逆に批判も浴びた。当初の意気込みは腰砕けに終わったといえるかもしれない。重複する時代に『西夏文華嚴経』(I, II, III 1975-77 年)を出版された。西夏文のファク

シミリに漢文を対照させ注記を添えたこの綺麗な本は古書店で高価な値が付いている。第三巻に載せられた西夏仏典の解説と目録は重要である。だが、『西夏語の研究』が立派なだけにあまり労作には見えない。

80年代に入って「西夏語韻図『五音切韻』の研究」(上・中・下1981～83年)を出される。やっと西夏語研究に回帰されたかと思った。この重要な内容をもつ大部の論文を単行本として一冊にまとめられることを勧めた。しかし実行されなかった。

一方で、この時代に契丹文字の解読に興味をもたれた。契丹文字研究小組の「関于契丹文字研究」(『内蒙古大学学报』1977年第4期)に触発されたところが大きいと思う。私にモンゴル語の動詞変化表を作るように依頼されたのも「解読」のためであった。随分真剣に取り組まれていた。冗談に「解けたらアルキメデスや」とおっしゃったのを覚えている。私にはなんだか「日本語の系統」研究への屈折した反動のように思えた。その結果は『アジアの未解読文字』(1982年)の中に反映されている。「解読」にはほど遠いが、読んで面白い本である。

1980年代後半から2000年初頭にかけては三省堂の『言語学大辞典』への項目執筆に熱心に取り組まれる。この項目記述の内容はチベット・ビルマ語研究や文字研究への大きな貢献といえる。西夏語の項目においても音韻体系などに修正を加えておられる。

上掲の『五音切韻』の研究以降も西夏語に関する論考や書評を次々に発表されるが、まとまった研究は2005～2006年に出版された西夏文『妙法蓮華経』の写真版とそれに付随する別冊『西夏語研究と法華経』(I～IV)である。傘寿を目前にして病魔と闘いながらも渾身の力を振り絞って書かれた。章題目「新視点の導入—双生字論」あるいは「西夏語の誕生とその終焉—その生涯」からも判断できるように、最新の発展内容を披露しながら西夏語研究を総括されたもので、先生の最後の体系的な記述といえる。途中寄り道もあったがこの成果をもって先生の研究は美事に締めくくられた。

このように先生の業績表を覗いてみれば、途切れること無く膨大な点数を出されたことに大概是圧倒される。しかしそれらを通観すれば、血の通った一個の人間として、その生き様に紆余曲折を観ることもできる。凡庸な研究者にとってはそのことがささやかな慰めとなる。

先生は「学者」ということばを嫌われた。しかし、紛れもない「学者」であった。それも「不世出の大学者」であった。

(京都大学名誉教授)

## 恩師西田龍雄先生を偲ぶ——先生と蔵緬語比較言語学

藪 司郎

元日本語学会会長 京都大学名誉教授 西田龍雄先生は平成 24 年（2012 年）9 月 26 日お亡くなりになった。享年 83 歳。昭和 34 年（1959 年）共同研究『居庸関』で学士院賞を、昭和 37 年（1962 年）「西夏文字の分析並びに西夏語文法の研究」で文学博士（京都大学）の学位を、昭和 43 年（1968 年）『西夏語の研究』で学士院賞・恩賜賞を授与された。その後も西夏語文献を渉猟し、西夏語研究を初め西夏の歴史や文化の研究に関する多くの論文・著書を公刊し、斯学の発展に尽くされた。東洋学への大きい貢献である。

西夏語（欧米ではタンゲート語）は、11 世紀初めから 13 世紀にかけて中国西北部にあった西夏国の公用語で、1036 年公布の国定文字、西夏文字で書かれた多くの文献を残し、14 世紀後半には死語となったと考えられる。西田先生の西夏語研究は、生涯の研究テーマとしてこられたシナ = チベット語（漢蔵語）比較言語学、なかんずく、チベット = ビルマ語（蔵緬語）比較言語学研究のなかに位置づけられる。平成 11 年（1999 年）学士院会員に選ばれ、平成 20 年（2008 年）には西夏語を中心とする蔵緬語歴史比較言語学研究の功績が評価され文化功労者として顕彰された。

西田先生の言語研究は、門下生のあいだで文献言語学と呼ばれた、文献を言語学的手法によって読み解き、さらにその内容を言語学的に分析する方法によって支えられてきた。その研究方法は、西夏語研究や明・清代の通詞用対訳語彙集「華夷訳語」の研究などによく反映されている。先生の文献言語の研究は文字学・文字論への深い関心によって裏付けられている。古い文字資料を扱う時、まず、その「文字の表わす示音質」（「字音質」sonus grammæ と言いかえてもよいだろう）と音韻とを峻別すべきことを指摘された。「字音質」とは、系統的に古い段階の文字原形、および、その系統のいくつかの文字が共通かつ慣用的に表わしていると考えられる音をいう。文字転写は、一般に、字音質を念頭においたものといえる。字音質は、古い時代のその言語の持っていた音と無関係ではないが、音の体系としての音韻とは、厳密に区別されねばならない（『Myazedi 碑文における中古ビルマ語の研究（一）』1955 年）。また、個別の文字については、西夏文字のなかの「双生字」（双子字）の発見がある。双生字とは意味上、文法上密接な関連性をもつふたつの言語単位を類似した一対の字形により書き表したものをいう（『西夏語研究と法華経（I）-（IV）』2007 年）。

一方、先生はフィールド言語学も早くから手掛けられた。昭和 29 年（1954 年）東京でのチベット語アムド方言の調査に始まり、昭和 33-34 年（1958-59 年）ビルマで、昭和 39-40 年（1964-65 年）タイ国で、いくつかのチベット = ビルマ系言語



の言語調査を行ない、収集した言語資料に基づいた記述研究と比較研究の成果を発表された。

また、西田先生の蔵緬語研究には、新たな言語資料の発掘とその分析に基づく比較研究への貢献もあった。文献言語では、無題の「華夷訳語」のひとつがロロ＝ビルマ系の未知の言語であることを発見、これを再構成し多續語（トス語）と名づけ西夏語、ロロ＝ビルマ諸語と比較研究した（1972年、1973年）ことや、音声言語では、タイ国の言語調査で未知の言語ビス語を発見し記述・比較研究した（1966年、1967年）ことをあげることができる。

西田先生は、蔵緬語比較言語学の研究者として当然のことながら、チベット＝ビルマ系の実に多くの言語を扱ってこられた。チベット＝ビルマ系諸言語の系譜関係を考える時、いくつかの言語群の言語特徴を併せ持ち、それらを互いに結びつける位置にある言語を「リンク・ランゲージ」（繋聯言語／特定言語・媒介言語）と呼び、比較研究におけるその重要性を指摘された。まず、ギャロン語（1957年）、カチン語（1960年）をとりあげ、のちにメイテイ語、チアン（羌）語、西夏語、ヌン語（1978年、1979年）をつけ加えた。これらの言語がどの言語群にも属しないということではなく、比較研究において大きい手掛かりを提供してくれるとみる。古い文献をもった言語が少なく、言語接触による混淆の激しいチベット＝ビルマ系諸言語の比較研究におけるひとつの作業仮説といってよい。

以下、先生の思い出を二、三述べよう。

言語の記述において、音韻目録の設定でいくつかの解釈が可能な場合、比較研究に資する音韻体系を念頭に置いて設定されることが望ましいという指摘が印象に残っている。

1930年代に出た、タイ系諸言語をシナ＝チベット語族シナ＝タイ語派から切り離してオーストロネシア語族との親縁関係を認めようとする異説、オーストロ＝タイ語説に、先生は容易には首肯されなかった。やや意地っ張りにもみえる先生の研究態度に研究者としての矜持が感じられた。

日本語とチベット＝ビルマ語との親縁性を指摘した、先生の日本語系統論（1976-77年、1979年）に関連し、以前、先生が雑談のなかで言われたことを妙にいまでも覚えている。ビルマ語の「ホウターベー」は「そうだっぺ」に似てるやろ、と。謹厳な先生のなかにも言われぬ滑稽さが垣間見えた。

京都大学にお勤めのころの先生の小規模なチベット・ビルマ語研究会を引継いで、平成15年（2003年）12月、有志の者で「チベット＝ビルマ言語学研究会」（TB研）（Tibeto-Burman Linguistic Circle, TBLC）を発会した。年3回の会合に、少人数ではあるが、全国の関連分野の研究者が集い今年でちょうど10年になる。初期のころ先生もお話しくださったし、毎回の会合の研究発表資料を先生にお送りしていた。

優れた言語学者は特定の言語を深く究めたうえに、独自の言語研究を築くものである。西田先生はシナ語（漢語）、西夏語、チベット語などに通暁し、そのうえに漢蔵語なかならず蔵緬語比較言語学の豊かな拡がりを展開された。（先生のご研究

について、詳しくは東方学会の『東方学』第119輯、2010年所載の「学問の思い出一西田龍雄博士を囲んで」を参照されたい。）

西田龍雄先生の深い学恩に感謝し一層の研鑽を積むことを誓って、謹んで先生のご冥福をお祈りいたします。

(大阪大学名誉教授)

## 弔 辞

吉田和彦

西田龍雄先生。先生の訃報に接し、言いようのない喪失感を禁じえません。もう西田先生とお話することができないという冷厳な事実は、にわかに受け入れることが困難です。お元気な先生のお姿が偲ばれてなりません。先生から教を受けたものを代表してご冥福をお祈り申し上げます。そしてこの弔辞に込められた先生への惜別の想いによって、ご遺族の皆様のお悲しみをいささかでも癒すことができればと心から願っております。

先生は西夏文字・西夏語の解説、そしてその後の西夏学の研究の推進という業績によって、国際的に広く知られています。未知の言語の解説が言語学の分野において、画期的な業績であることは言うまでもありません。しかしながら、解説という栄誉に浴した研究者が、その解説された言語にかかわる研究をさらに飛躍的に発展させたことはむしろ稀であります。ところが、西田先生の場合は、伝統的な漢語音韻学を踏まえた現代言語学の方法論の適用によって1960年代半ばに解説を成し遂げられた後も、途切れることなく西夏語研究を続けられ、まさに今日の西夏学の発展を牽引されてこられました。そして西夏語に代表される一連のご研究によって、1959年に日本学士院賞、1968年に日本学士院賞恩賜賞、そして1994年に朝日賞を受賞されました。また、1999年には日本学士院会員に、そして2008年には文化功労者にご選出されました。

教育の面でも、先生は実にさまざまな分野にわたる人材を数多く育成されました。しかしながら、手とり足とりといった指導はなされず、むしろ学生たちの主体性を重んじておられたように思います。多くの学生は、圧倒的な研究成果を次々に発表される先生を仰ぎみると同時に、少しでも先生に近づけるよう努力していたと思います。つまり、先生にとっての教育とは、自らの研究を高めることと等価であったと言えます。学術の国際化についても、同じお考えを持っておられたように思います。

京大をご退官の後、文学部図書館や吉田山のふもとにある朋友書店に足を運ばれたついでに、ときどきわたしの研究室に立ち寄られました。そのような機会には、

ご在職中と打って変わり、昔のことを懐かしそうにお話されることがありました。第2次世界大戦末期のころ、先生は大阪外事専門学校の学生でしたが、枚方にあった日本陸軍の火薬庫で働いていたときに、アメリカの戦闘機グラマンに銃撃され、あやうく命を落とされそうになった体験もお聞きしました。その当時は学問をするどころの状況ではありませんでしたが、それでも大陸の文化に対する強い憧れから、中国語の勉強を続けていたと口にされました。そのお言葉を聞いたとき、わたしは先立つ世代に対する劣等意識をおぼえずにはられませんでしたが、勉学の継続がきわめて困難な状況であっても、みずからの夢に向かって進んでおられた若き日の先生を思うと、いまのわたしたちが少々のこと弱音を吐くのは不謹慎とさえ思えます。

先生は研究者として生涯現役でした。晩年にも日本学士院紀要や東洋哲学研究所から新たな知見をつぎつぎに発表されておられました。そのような最近の著作を選んで、論文集のかたちで刊行する計画が門下生のあいだで進んでおりました。ご存命のときに刊行が間に合わなかったのは痛恨の極みですが、刊行の暁には先生を偲ぶ会を開き、ご霊前に捧げたいと考えております。

先生からは多くのことを教えていただきました。その学恩を忘れることなく、わたしたち門下生は前に進んでいきたいと思えます。これまでのご指導に心からお礼申し上げますとともに、謹んでお悔やみ申し上げます。

(以上は、平成24年9月29日に執り行われた故西田龍雄先生のご葬儀において、京都大学文学研究科言語学教室を代表して奉読した弔辞をご遺族のご了解を得て掲載させていただいたものである。なお、本文で言及された論文集は『西夏語研究新論』として後に刊行され、平成25年2月11日に京都大学文学研究科ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）で開催された西田先生を偲ぶ会においてご霊前に捧げられた。)

(京都大学文学研究科教授)

## 略年譜

- 昭和3年11月26日 大阪市に生まれる
- 昭和23年4月 京都大学文学部入学
- 昭和26年3月 京都大学文学部文学科言語学専攻卒業
- 昭和26年4月 京都大学(旧制)大学院(文学部)研究奨学生
- 昭和31年3月 同上修了
- 昭和31年4月 京都大学文学部非常勤講師(昭和33年6月まで)
- 昭和33年7月 京都大学文学部助教授
- 昭和33年10月 ビルマ国出張(昭和34年5月まで)
- 昭和34年5月 共同研究『居庸関』により日本学士院賞受賞
- 昭和37年3月 学位請求論文「西夏文字の分析並びに西夏語文法の研究」により文学博士の学位を授与される
- 昭和38年5月 AA研設立準備のため欧州諸国に出張(昭和38年6月まで)
- 昭和39年9月 タイ国出張(昭和40年2月まで)
- 昭和43年5月 『西夏語の研究』により日本学士院賞、恩賜賞受賞
- 昭和45年3月 文部省在外研究員として連合王国、ソビエト連邦等に出張(昭和46年1月まで)
- 昭和47年2月 京都大学文学部教授
- 昭和51年1月 京都大学評議員(昭和53年1月まで)
- 昭和53年1月 京都大学文学部長、同評議員(昭和54年1月まで)
- 昭和54年4月 日本言語学会会長(昭和56年3月まで)
- 昭和60年7月 第13期日本学会議会員(昭和63年6月まで)
- 昭和61年4月 京都大学附属図書館館長、同評議員(平成元年3月まで)
- 〃 国立大学図書館協議会副会長(平成4年3月まで)
- 〃 学術情報センター運営協議会副会長(平成4年3月まで)
- 平成元年4月 京都大学附属図書館館長、同評議員に再任(平成4年3月まで)
- 平成4年4月 京都大学名誉教授
- 〃 学術情報センター教授、副所長(平成6年3月まで)
- 平成4年7月 大同生命地域研究賞受賞
- 平成6年1月 朝日賞受賞
- 平成6年6月 学術情報センター名誉教授
- 平成11年12月 日本学士院会員
- 平成13年1月 講書始の儀にて御進講「西夏文字研究の新段階」
- 平成15年11月 瑞宝重光章受章
- 平成17年1月 京都府文化賞特別功劳賞受賞
- 平成20年11月 文化功労者
- 平成24年9月26日 京都府宇治市にてご逝去。正四位に叙せられる。

## 西田龍雄博士 主要著作目録

## 【著書】

- 1964 『西夏語の研究—西夏語の再構成と西夏文字の解説—』I, 東京:座右宝刊行会.
- 1966 『西夏語の研究—西夏語の再構成と西夏文字の解説—』II, 東京:座右宝刊行会.
- 1966 『生きている象形文字—モン族の文化—』(中公新書 112), 東京:中央公論社.
- 1967 『西夏文字—その解説のプロセス—』(紀伊國屋新書 A-30), 東京:紀伊國屋書店.
- 1970 『西番館訳語の研究—チベット言語学序説—』(華夷訳語研究叢書 I), 京都:松香堂.
- 1972 『緬甸館訳語の研究—ビルマ言語学序説—』(華夷訳語研究叢書 II), 京都:松香堂.
- 1973 『多統訳語の研究—新言語トス語の構造と系統—』(華夷訳語研究叢書 VI), 京都:松香堂.
- 1975 『西夏文華嚴經』I, 京都:京都大学文学部.
- 1976 『西夏文華嚴經』II, 京都:京都大学文学部.
- 1977 『西夏文華嚴經』III, 京都:京都大学文学部.
- 1979 『傀儡訳語の研究—口語の構造と系統—』(華夷訳語研究叢書 IV), 京都:松香堂.
- 1980 *The Structure of the Hsi-hsia (Tangut) Characters (Monumenta Serindica 8, translated by J. A. Matisoff)*, Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.
- 1982 『西夏文字—解説のプロセス—』(増補版), 東京:玉川大学出版部.
- 1982 『アジアの未解説文字』, 東京:大修館書店.
- 1984 『漢字文明圏の思考地図』, 京都:PHP 研究所.
- 1986 『異境の民とオルドスの興亡』, 東京:NHK 出版 (NHK 取材班と共著).
- 1989 『西夏文字の話—シルクロードの謎—』, 東京:大修館書店.
- 1990 『白馬訳語の研究』(華夷訳語研究叢書 VII), 京都:松香堂 (孫宏開氏と共著).
- 1992 『西夏語研究を顧みて』, 京都:京都大学文学部言語学研究室.
- 1994 『西夏文字—その解説のプロセス—』(紀伊國屋新書 A-30), 東京:紀伊國屋書店 (復刻版).
- 1995 『文字鼻根—文字のエッセンスをめぐる3つの対話—』, 東京:三省堂 (河野六郎氏と共著).
- 1997 『西夏王国の言語と文化』, 東京:岩波書店.
- 1998 『西夏語研究新論』, 京都:西田先生古稀記念会.
- 2000 『東アジア諸言語の研究I—巨大言語群—シナ・チベット語族の展望—』, 京都:京都大学学術出版会.

- 2001 『生きている象形文字—モン族の文化—』, 東京: 五月書房 (改訂増補版).
- 2002 『アジア古代文字の解説』 (中公文庫), 東京: 中央公論新社 (上記『アジアの未解説文字』の増補改訂版).
- 2005 『ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ支部所蔵西夏文「妙法蓮華経」』 (*Текст Сутры Лотоса на тангутском (Си Ся) языке из коллекции Санкт-Петербургского филиала Института востоковедения Российской Академии Наук, СПбф ИВ РАН*) SPb: IOS RAS, 東京: 創価学会.
- 2007 『西夏語研究と法華経 (I)–(IV)』合冊本, 東京: 東洋哲学研究所.
- 2008 『西夏語研究—西夏語の構擬與西夏文字の解讀』李範文 (主編) 『西夏研究』第7輯, 中国社会科学出版社.
- 2009 『西夏文「妙法蓮華経」訳注 (上)』, 東京: 東洋哲学研究所.
- 2012 『西夏語研究新論』, 京都: 松香堂.

#### 【編著書】

- 1981 『世界の文字』 (講座 言語 第5巻), 東京: 大修館書店.
- 1986 『言語学を学ぶ人のために』, 京都: 世界思想社.
- 1990 『東アジアにおける文化交流と言語接触の研究—中国・チベット・インドを中心に—』, 京都: 京都大学文学部.
- 1994 *Current Issues in Sino-Tibetan Linguistics*. Osaka: National Museum of Ethnology (H. Kitamura, Y. Nagano と共編著).
- 1999 *Каталог тангутских буддийских памятников института востоковедения российской академии наук*, Киото: Университет Киото (Е. И. Кычанов と共編).
- 2001 『言語学大辞典別巻 世界文字辞典』, 東京: 三省堂 (河野六郎, 千野栄一氏と共編著).

#### 【訳書】

- 1958 B. カールグレン著 『中国の言語—その特質と歴史について—』 (B. Karlgren, *The Chinese Language: an Essay on its Nature and History*), 東京: 江南書院 (大原信一, 辻井哲雄, 相浦杲氏と共訳).
- 1978 S.K. シャウミヤン著 『適用文法入門』 (С.К.Шаумян, *Аппликативная грамматика как семантическая теория естественных языков*), 東京: 大修館書店 (監訳書・船山伸他訳).
- 1981 R. A. ミラー著 『日本語とアルタイ諸語』 (R. A. Miller, *Japanese and the Other Altaic Languages*), 東京: 大修館書店 (監訳書・近藤達夫, 庄垣内正弘, 橋本勝, 樋口康一氏訳).

その他, 論文およそ 300 点